

## 会員の広場



### 第三の旅の愉しみ

廣中 聰（東京）

「ラールキラー」をご存じの方は、北インドを旅した人以外には、あまりおられないと思う。最近手に取った『インド独立の志士「朝子」』（笹井亮平著、白水社）の中盤で、インド国民軍裁判の地として出てきた。私は、2007年早春の1週間北インド3都市を旅した。

旅の愉しみとラールキラーとの出会いについて触れてみたい。

旅の愉しみは、三度あるといわれる。第一にプラン作りと事前勉強による知識増と期待の高まり。第二に現地での五感を通じての体験、発見など。第三に旅の思い出を反芻し豊かにする種ができる。

海外旅行には、手作りの旅とパッケージツアーがある。私の場合、初期を除き圧倒的に前者である。効率と安全では劣るが、自由と現地とのふれあいという面で、魅力がある。

インドへの関心は、まず新興大国BRICSの一員であることで、現地にてその国の空気に触れておかねばというもの。そしてタージマハールへのあこがれである。その折は、

小手調べとして、北インドのデリー、アグラ、ジャイプールの周遊を選んだ。航空券とホテルは、HISにて手当。三都市間交通は、鉄道としたが、最後の区間は、予約できず、現地対応とした。

デリーの地はムガル帝国の首都で、見るべきものは多々あり、タクシー、リクシャーを駆使。料金を都度ネゴして回る。この時ラールキラー、赤い砦（レッドフォート）を訪ねる。ムガル帝国皇帝によって造られた赤い砂岩の堂々たる王城である。この時は詳しく知らなかったが、セポイの反乱（1857-59）時、拠点となり英軍の攻撃を受けた。次はアグラに。タージマハール観光の拠点である。宿願の建造物であり、まさにインクレ

ディブル（存在感、美麗、均整美、そして白亜のドーム）であった。二日にわたり楽しむ。第三の訪問地は、乾燥したラジャスタン州の州都ジャイプール。

ヒンズー教徒武人のマハラジャの建てた岩山のいただきにあるアンベール城など見どころは多い。デリー空港は、約260KM北東タクシーで走った。ハリヤナ州では、日系の工場が建設中であった。

今ラールキラーと日本の歴史のかかわりを学ぶ。西欧列強のアジア進出は、中印に見ることく苛烈であったが、日本には慎重であった。その説明の一つが、セポイの反乱、アヘン戦争（1840-42）による民衆の抵抗方に学んだことだという。